

男女共同参画推進センターのホームページが新しくなりました！

センターのホームページが新しくなりました。トップページのデザインを一押し、見やすくしたことに加え、「第一線で活躍する研究者たち」「最先端で輝く先輩たちのキャリアパス」「Web マガジン」など、新しくコンテンツを追加しています。Web マガジンでは、「イクメン

たちのワークライフバランス」と題し、待機乳児保育室を利用された男性研究者のお話を紹介しています。より内容が充実した新しいホームページをぜひご活用ください！

<http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp>

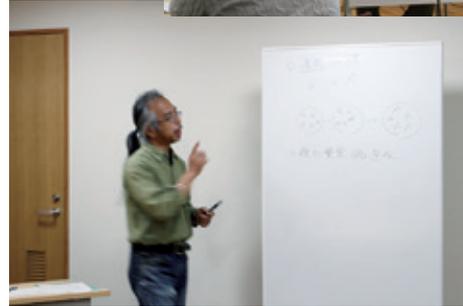


ILAS セミナー「ジェンダーと科学」開講

平成 28 年度の ILAS セミナー「ジェンダーと科学」が開講しました。1 回生を対象に、少人数での講義、討論などを通して、ジェンダーについての基礎知識や考え方を身につけます。講師 3 名で講義を行いました。

「ジェンダーと科学」講師・テーマ一覧

講師	テーマ
伊藤 公雄 (文学研究科 教授)	ジェンダーと科学
山内 淳 (生態学研究センター 教授)	性の進化について
速水 洋子 (東南アジア研究所 教授)	ジェンダーと文化人類学



全学共通科目（前期）「ジェンダー論」開講

伊藤 公雄教授の全学共通科目「ジェンダー論」が開講しました。現在、さまざまな学術分野で重要な概念として使用されつつあるジェンダーについて、主に人文社会科学の視点から考察することを通して、ジェンダーに敏感な視点を養います。「生物学的性差とジェンダー」「文化のなかのジェンダー」「歴史とジェンダー」「教育とジェンダー」などジェンダーに関する様々な課題について講義を行いました。



ベビーシッター利用育児支援

京都大学男女共同参画推進本部では、本学における教職員の仕事と子育ての両立支援を目的として、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッター事業者が提供するサービスを利用した場合に、その利用

料金の一部を助成しています。対象事業は以下の 2 つです。詳細、ご利用につきましては、センターのホームページをご覧ください。

対象事業	①ベビーシッター派遣事業	②ベビーシッター派遣事業（多胎児分）
利用対象者	配偶者が就労している、もしくは配偶者の病气入院等により、サービスを使わなければ就労することが困難な本学教職員	義務教育就学前の双生児等多胎児を持つ本学教職員
対象児童年齢等	0 歳～小学校 3 年生、その他健全育成上の世話を必要とする小学校 6 年生までの児童	義務教育就学前の児童（多胎児以外の児童を含む）
割引金額	1 日につき 1 家庭 2,200 円（2,200 円以上で利用可）	1 日につき 1 家庭 9,000 円（2,200 円以上で利用可） 義務教育就学前の多胎児が 3 人以上の場合は、18,000 円（2,200 円以上で利用可）
割引券の利用可能枚数	1 日 1 枚、1 月 24 枚、1 年 280 枚まで	1 日 1 枚、1 年 2 枚まで

病児保育室の開室時刻が7時半からになりました。

病児保育室を利用されている方からご要望の多かった早朝のお預かりについて、体制が整ったため、開室時刻を7時半からに早めることとなりました。それに伴い、当日朝の予約方法に変更があります。詳細はセンターのホームページをご覧ください。



病児保育室「こもも」

設置場所	京都大学医学部附属病院 外来棟5階
対象者	京都大学教職員及び学生の子どものみで、病中・病後の子ども
対象年齢	生後6ヶ月～小学校3年生
定員	5名（隔離室を含む）
開室日	月曜日～金曜日
保育時間	7:30～19:00
料金	子ども1人につき、1時間あたり500円（昼食・おやつ代を含みます） ※保護者が学生の場合は、保育料金の半額を大学が負担します。
保育体制	看護師、保育士

京都産業大学教職員セミナーにて小石先生が講師

6月8日（水）、京都産業大学にて教職員セミナー「成果を出すための工夫」—仕事と家庭の両立—が行われ、本学から白眉センター（人文科学研究所）特定助教の小石 かつら先生が講師として参加しました。小石先生は、京都大学の研究実験補助者利用制度の利用者として、制度や仕事と家庭の両立について自らの経験をもとに話をしました。このセミナーは、大学の支援制度への理解を深め、仕事と家庭の両立について実践例を参加者で情報共有するとともに、男女共同参画について考える機会とするもので、京都産業大学ダイバーシティ推進室主催、京都工芸繊維大学KIT男女共同参画推進センター、京都大学男女共同参画推進センターの協力のもと行われました。



香港城市大学の学生が男女共同参画推進センターを訪問しました。

5月25日（水）、香港城市大学の学生15名、引率者1名が京都大学男女共同参画推進センターを訪問しました。

センターの会議室にて、本学の伊藤 公雄教授（男女共同参画推進本部支援室長）が日本におけるジェンダーについての講義を行い、グローバルジェンダーギャップやジェンダーの歴史、男女平等が進まない理由、DV、働く女性の支援などについて説明し、学生は資料を見ながら熱心に聞き入っていました。質疑応答の時間には、「日本において女性の大学進学率が低いのはなぜか」「大

学に進学しなかった女性はどのような職業に就くのか」「これから女性の社会進出は進むか」「時間外労働の上限はあるか」など、学生から次々に質問が寄せられ、伊藤先生が回答しました。また、反対に香港の現状を学生に話してもらうなど、講義は大いに盛り上がりしました。その後、伊藤先生が、センターの概要や京都大学における女性研究者、女子学生支援の取り組みを紹介し、講義を終了しました。講義後は全員で記念撮影をし、学生はセンターの保育室を見学した後、笑顔でセンターを後にしました。



連載：研究者になる！－第57回－

研究者への道程と家庭との両立

理学研究科・准教授 小西 由紀子

2008年に京大数学教室に来て8年になります。実はずっとこの連載を楽しみにしていて、(1)執筆された方がどういう経緯で研究者への道を行っていったのか、また(2)家庭との両立をどうされているのか、興味深く読ませていただいております。そういうわけで私もこの2点について書かせていただきます。

まずは(1)から。高校生のとき素粒子論に憧れて、大学では物理学を専攻しました。しかし、大学院で念願の素粒子論研究室に入れたのはよかったものの、そこで大きくつまずきました。修士1年のとき場の理論と弦理論の教科書を読むセミナーがあったのですが、難しかった。そしてそれが終わったあとは自分でテーマをみつけて研究を始めなければなりません。しかし最新の論文もセミナーの講演もさっぱり分からずで、同期の人たちが着々と論文を書いていくのに焦る日々。ストレスで過食したり、不安で夜中に目が覚めるようになったりしました。鬱にならなかったのはひとえに妹といっしょに暮らしていたため研究以外に逃避できる場所があったからだと思います。見かねた先輩が共同研究に誘ってくださってなんとか論文を書くことができ、学位をとりました。

つまずいた原因は何だったのか、かなり考えました。一つは勉強の仕方にあったと思います。学部時代、私は講義内容しか勉強しませんでした。大学院での研究をみすえて専門の分野の勉強を始めておくべきでした。また、自主ゼミで他の人と議論しながら理解を深めるという経験を積んでおくべきでした。もう一つの大きい原因は私のコミュニケーション能力の低さだと思います。当時周りの人にもっと心を開いて相談していれば、どうすべきか指針を見つけれられたのかもしれない。

さて、今でもそうだと思いますが、私が学位を取った頃の素粒子論業界は大変な就職難でした。大学教員になることはもちろん、国内でポスドクの職を得ることも難しく、優秀な人でさえ海外へ行かざるをえない状況でした。落ちこぼれの私を雇ってくれるところがあるはずありません。もうあとがないという思いで数理解析研究

所の齋藤恭司先生にお願いし、研修員としておいていただくことになりました。(研修員とは研究生のようなものです。)面識もなかった私をあたたかく受け入れてくださった齋藤先生とその研究室の方達には感謝してもしきれません。そこでお世話になった3年間、毎週土曜日のセミナーでとても刺激を受けました。いくつか論文も書け、学振特別研究員となった後に京大数学教室に講師として採用されて現在に至ります。

次に(2)について。両親の不仲を見てきた私は中学生の頃から、結婚とは女性が苦勞するシステムであると考えていました。もちろんこれは一般論としては正しくありませんが、結婚して幸せな人もいるということが、頭では理解できてもなかなか納得できません。やっと納得できたのは数理研時代に尊敬する女性研究者に出会ってからです。

その後共同研究者として夫と出会い結婚しました。研究者どうしだとよくある話だと思いますが、ずっと別居です。4年前妊娠した時に話し合い、夫の職場のある東京都では保育所入所が難しいことから、子供は私と京都で暮らすことにしました。夫は毎週末帰ってきて家事と子供の相手をしてくれます。それでも子供は夫が普段いないのが寂しいようですが、どうしようもありません。

子供がいると仕事にかけられる時間が足りない切実に思います。夕方、あと30分あればこの用事をすませられるのに、というときでも保育園へ迎えに行かなければなりません。家事は家電と食材宅配を利用してできる限り手を抜いていますが、それでも单身時代の倍以上やることがあります。また家で仕事をしていると子供が遊んでほしがるので、それもできません。もう少し大きくなったら子供が宿題をする隣で論文を読めるようになるのでしょうか。

たまに研究集会に行く機会があると浦島太郎状態の自分を意識してしまって落ち込みます。「自分は研究者としてやっていけるのか」と悩んだ院生時代に戻ったみたいです。でも家族と過ごす時間があるためか昔のように闇雲に不安ではありません。



Gender Equality Promotion Center

〒606-8303 京都市左京区吉田橋町
 電話 075 (753) 2437
 FAX 075 (753) 2436
 E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
 HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>